

岐阜方言として記述される共通語

Standard Japanese described as Gifu dialects

山田敏弘

YAMADA Toshihiro

lingua@gifu-u.ac.jp

1. はじめに

各地の方言辞典を見ていると、明らかに共通語としても用いられる表現が方言として記述されていることが意外と多いことに気づく。「あおばな」「あおりたてる」「あかご」「あからさま」「あからめる」「あきんど」… これらは、すべて岐阜県内の市町村史に見られる「方言」の記述である¹。しかし、手近な辞書を繰れば、これらの語の記述はすぐに見つかる。『日本国語大辞典』や『広辞苑』のような古今東西のことばを集めた辞書ではなく、『新明解国語辞典』や『明鏡国語辞典』といった机上版で一冊になっている辞書に見つかるのである。これらの「国語辞典」は、編集方針として「現代の言語生活において最も普通に用いられる日本語」（『新明解国語辞典』）や「基本的な現代語を中心に（中略）主に話し言葉で用いられる俗語」（『明鏡国語辞典』）を収録するという立場であるから、明確に規定はされていないが、いわゆる「全国共通語」がこれらの辞典には収録されていると考えてよいであろう。ゆえに、これらの辞典に載っている語句が、方言集に載っているとすれば、それは、「方言」の扱い方が異なるか、誤って「方言」と捉えられて収録されているかのいずれかと考えなければならぬ。

その土地で話されている語彙の総体が方言であるとの考え方は確かにある。宮島達夫（1962）は、このような立場を主張したもっとも早くまた代表的な論考のひとつであり、真田ふみ『越中五箇山方言語彙』などに代表される方言記述は、そのような方針で編まれている代表的なものである。しかし、このような立場で編纂される方言集は少数派で、また、今回、岐阜県内の市町村史に収められている方言の記述は、基本的にそのような立場を採っていない。なぜならば、地域的に限っているとはいえ、語彙の総体を記述しようとするれば膨大な語を収録しなければならないからである。よって、全国的に主流である「俚言」を「方言」として収録する方法が県内でもよく採られる。

それなのに、なぜこのような共通語が「方言」として記述されるのであろうか。本稿では、岐阜県内の市町村史における「方言の記述」が基本的に俚言のみを収録するという立場で書かれているものという前提に立ち、その中で「方言」がどのような意識によって記述されているのかを考察することを通じて、「方言」と「共通語」の認識について考察していく。

2. 「方言」とは

上に述べたとおり、「方言」のとらえ方には大きく分けて2種類ある。方言研究者であればあたりまえのことであるが、俚言のみを「方言」と捉えることは、本来正しくはない。その地域で使われる言語すべてを「方言」として捉え記述するというスタンスは、現在、研究者の中で広く共有されるも

1 「あおばな」は『大野町史 通史編』（1985）、『宮川村誌 通史編 下』（1981）、『飛騨河合村誌 通史編 全』（1990）に、「あおりたてる」は『上宝村史 下巻 資料編』（2005）、『丹生川村史 民俗編』（1998）に、「あかご」は『大垣市史』（1930）に、「あからさま」は『美並町史 通史編 下巻』（1984）に、「あからめる」と「あきんど」は『岩村町史』（1961）に見られる。

のとなっている。しかしながら、「方言」として一般に記述されるのは「俚言」とであるということもまた事実であり、各市町村史(誌とも:「市町村史」として代表させる)のように限られた紙幅に記述されるものは特にそうである。

本考察では次のように分けて考えていく。

① 俚言: その地域特有の方言語彙。

他の地域でまったく記述されないものから、広い地域で記述されるものまでである。

② 音訛: 程度の差はあれ共通語と音の違いが認められるが、語自体は共通語にあるもの。

③ 共通語: 全国で共通に使用される語彙であり、音の差も看過できる程度のものであるもの。

音訛とは、次のようなものである。用例は、各地の方言集からアトランダムに選んだ。

(1) とぼす	燈す	[芥見郷土誌 (1961:417)]
(2) さびしい	淋しい	[岩村町史 (1961:556)]
(3) しと	人	[府中村誌 (1934:民10表)]
(4) じばん	じゅばん。	[多治見のことば (1974:77)]
(5) じっちり	じっくり	[南濃町史 通史編 (1982:1208)]
(6) シテエ	したい	[新修 上石津町史 (2004:735)]
(7) シテタ	捨てた。	[丹生川村史 民俗編 (1998:623)]
(8) とふ	豆腐の短音化	[関ヶ原町史 通史編別巻 (1993:140)]
(9) トノビョー	糖尿病。	[丹生川村史 民俗編 (1998:574)]
(10) とんがらし	唐辛子	[平田町史下巻 (1964:1210)]

(1)~(5) は、子音の交替である。(1) と (2) は、同じ有声唇音のmとbの交替によって得られる語形である。「ともす」は、『日本国語大辞典第2版』「ともす」の項の語誌に「上代から平安初期にかけては『ともす』の例しか見えないが、平安中期にm→b交替形の『とぼす』が出現し、中世には『ともす』を圧倒するまでに勢力を伸ばした。しかし、近世になると再び『ともす』が勢力を盛り返し、遂には『とぼす』を中央語から駆逐した。現在では、方言を除いて『とぼす』は見られない」とある。つまり、「とぼす」はかつて方言でなかったが、現在は方言として記述するに適切な語形であるということである。

一方、「さびしい」については、同じく『日本国語大辞典第2版』の語誌に「現代『さびしい』『さみしい』は同じように用いられるが、古くからあった『さびしい』を標準語形とみる考えが有力で、放送などでは『さびしい』が採用されている」とある。この点で、(2) の『岩村町史』に載っている「さびしい」の例は、方言として挙がっている語が共通語であって、訳として示されている(方言語形と同じ読みではないことから推察される)「さみしい」が共通語という逆転が見られる。あるいは、方言と共通語の混乱が生じているとも捉えられる。なお、岐阜県内で「さみしい」を方言として挙げている市町村史は存在しない。

「し」と「ひ」は、同じ硬口蓋摩擦音であり交替しやすい。「人」が「シト」となるのであれば、「一人」が「シトリ」になったり、逆に、「七・質」が「ヒチ」になったりする記述も見られてしかるべきである。つまり、このような音訛は、「方言」として記述されるべきものであるとしても、俚言とは別のレベルとして記述されるべきである。なぜならば、個別に辞書に挙げるべきものであるというよりも、より広範囲に同様の現象が見られる体系的交替であり、個別に記述しても漏れを生じることが多いからである。事実、音訛の記述はほとんどの方言記述においてアトランダム、悪く言えば、場当たりのでしかないのである。もちろん、『郡上方言』のように、個別に辞書的に記述した上で音

声変化のまとめをおこなう方法もあろう。いずれにしても、「方言」を「音訛」と「俚言」と分けて考えることは重要である。以降、本考察では、「音訛」を除いて考えていくこととする。

3. 音訛以外の共通語がなぜ方言集に取り入れられるのか

さて、音訛を取り除いたとして、「何が方言か」を認定することは容易ではない。これは、母方言と向き合ったことがある人であれば、研究者であるか否かによらず感じることである。ところが、「何を採録すべきであるのか」については、方言研究法の手ほどきなどにすでに書かれたものは多いが、管見の限り「何を採録すべきではないのか」という点について述べているものは、ほとんどない。

もちろん、基本として「その土地で用いられるすべての言語を記録する」という包括的記述の立場であれば、採録すべきでないものは理論上ないのであるから、そのような記述は見られなくて当然なのかもしれない。しかし、実際には「俚言」＝「方言」という採録方針で編纂される方言集が各地で主流となっているのであるから、「方言（共通語）はどのように認定し、方言採録の際に注意すべきことは何か」という観点で述べられている「指南書」が、今日より多くの目に触れる場に存在するのにもまた現実的には望まれることである。

本節では、「もし俚言だけを取り上げて方言集を編むとしたら、次のような共通語が採録されやすいので気を付けた方がよい」という観点から、これまで岐阜県内の市町村史等に見られた「共通語」を見ていく。

3.1 共通語採録の理由

共通語が方言集に採録される理由は3つに分けて考えることができる。

1つは、古い表現が記述される場合である。

- | | | |
|----------|-----|--------------------------|
| (11) さよう | そうだ | [南濃町史 通史編 (1982:1208)] |
| (12) さよう | そうだ | [養老町史 通史編 下巻 (1988:836)] |

『南濃町史』と『養老町史』の方言に関する記述は参照関係にあり、この2町史の記述をもって方言として広く用いられているとは言い難いが、しかし、複数の町史でこの語が「方言」と捉えられているのは興味深い。もちろん、「失礼しました」の意の「ゴブレーシマシタ」や、「ばか」の意の「タワケ」など、これらの語や表現が過去には広く使われ「共通語」と言ってもよい状態であったが、現在は地域的に限定されて用いられているということもある。方言が所詮時差によって生じるものであるとすれば、これらが「方言」でないと断言するのは難しいかもしれない。古老だけが使っていると言うこともあるとして、一体、どのような、またどれだけの町民が使用すれば「方言」と言えるのかは難しい。「方言」とは、常に相対的にしか規定されないものなのである。

一方、すでに使われなくなった古い事物の名称が記述されることもある。地域別に並べて示す。

- | | | |
|------------|--------|------------------------|
| (13) くど | 竈 | [芥見郷土誌 (1961:413)] |
| (14) くど | 竈 (かま) | [岐阜市鷺山史誌 (1988:784)] |
| (15) くど | かまど | [島郷土誌 (1978:1096)] |
| (16) くど | かまど | [川島町史 通史編 (1982:1295)] |
| (17) クド | 竈 | [山縣郡志 (1918:343)] |
| (18) くど | 竈 | [美山町史 通史編 (1975:1323)] |
| (19) くど | かまど | [真正町史 通史編 (1975:1037)] |
| (20) くど(ば) | かまどの古語 | [大野町史 通史編 (1985:1315)] |

(21) くど	竈 (かまど)	[赤坂町史 (1953:531)]
(22) くど	かまど	[府中村誌 (1934:民9裏)]
(23) くど (竈)	へっつひ	[大垣市史 (1930:1041)]
(24) くど	かまど	[池田町史 通史編 (1988:902)]
(25) くど (おくどさん)	かまど 半ば死語	[関ヶ原町史 通史編別巻 (1993:132)]
(26) クド	かまど	[新修 上石津町史 (2004:732)]
(27) くど	かまど	[平田町史下巻 (1964:1199)]
(28) くど	かまど	[南濃町史 通史編 (1982:1206)]
(29) くど	かまど	[藤橋村史 下巻 (1982:174)]
(30) くど	かまど	[垂井町史 通史編 (1969:841)]
(31) くど	かまど	[養老町史 通史編下巻 (1988:834)]
(32) くど	竈	[洞戸村誌 (1925:143)]
(33) くど	かまど	[上之保村誌 (1976:416)]
(34) クド	かまど	[新修関市史民俗編 (1996:887)]
(35) くど, ふど	かまど	[黒川村誌 (1937:107)]
(36) クド	▽かまど	[御嵩町史民俗編 (1978:712)]
(37) くど	かまど。	[多治見のことば (1974:69)]
(38) クド	かまど	[上矢作町史民俗編 (2008:637)]
(39) くど	かまど	[飛驒下呂 通史・民俗 (1990:462)]
(40) クド	かまど。	[神岡町史通史編Ⅱ (2008:1085)]
(41) クド	炭がまの煙出し	[飛驒河合村誌通史編全 (1990:1103)]

「かまど」はもちろんであるが、「くど」もふつうの辞書に載る「共通語」である。これを「方言」として記述せしめているものは何か。それは、「物」がすでに家庭内から縁遠い存在になったということである。「方言」とは、縁遠くなった昔のことば、このような意識がこの「かまど」の例から読み取れる。かつてあった表現としては、『芥見郷土誌』や『岐阜市鷺山史誌』には、「電気玉 (電球)」や「官員様 (公務員)」といった記述が見られる。いわゆる「死語」と「方言」とは異なるが、「縁遠くなったことば」という点で共通するとすれば、これらの記述をそのような意識の表れと取ってもよいであろう。

2 番目に、俗語的な表現や卑語が、方言として捉えられやすい傾向にあることが指摘される。方言は野卑な表現であるという誤った見解がこの根底にはあると考えられよう。

(42) ぐる	共謀	[岩村町史 (1961:554)]
(43) ぐる	共謀	[袖川村誌 (1916:188)]
(44) グル	共謀	[清見村誌下巻 (1976:741)]
(45) グル	共謀	[飛驒河合村誌通史編全 (1990:1102)]
(46) こいつ	これ	[美山町史 通史編 (1975:1325)]
(47) こ, いつ	代。此奴なり。	[本巢郡志 (1923:332)]
(48) こいつ (同)	これ	[大垣市史 (1930:1043)]
(49) こいつ	この人	[大垣市史青墓編 (1977:648)]
(50) こいつ	これ	[海津町史 (1972:235)]

(51) コイツ	こやつ	[金山町誌 (1974:1313)]
(52) こいつ	この人・この物	[下呂町上原誌 (1972:555)]
(53) こいつ	この人	[下呂町誌全 (1954:707)]
(54) こいつ	この人, この物	[飛驒下呂 通史・民俗 (1990:463)]
(55) けつ	しり (尻)	[厚見郷土史 (1987:298)]
(56) けつ	しり (尻)	[笠松町史 第三卷 (1957:538)]
(57) けつ	尻	[川島町史 通史編 (1982:1295)]
(58) ケツ	臀	[山縣郡志 (1918:343)]
(59) けつ	臀部	[美山町史 通史編 (1975:1322)]
(60) けつ	しり (尻)	[本巣町史通史編 (1975:1301)]
(61) けつ	尻	[府中村誌 (1934:民10表)]
(62) けつ	尻	[揖斐川町史 通史編 (1971:891)]
(63) けつ	しり (尻)	[平田町史下巻 (1964:1199)]
(64) けつ	臀	[洞戸村誌 (1925:144)]
(65) ケツ	尻	[八百津町史 (1982:757)]
(66) けつ	尻	[上之保村誌 (1976::417)]
(67) けつ	尻	[東白川村誌 (1914:224)]
(68) けつ	尻	[西白川村誌 (1924:(7))]
(69) けつ	①尻。②転じて一番しまい。ピリの意をもつ。[多治見のことば (1974:70)]	
(70) けつ	尻 (しり)	[蛭川村史 (1974:972)]
(71) けつ	最後, げつ, どげつ, けつぱ, 尻	[岩村町史 (1961:554)]
(72) けつ	尻	[袖川村誌 (1916:188)]
(73) ケツ	尻・最後	[飛驒河合村誌通史編全 (1990:1103)]

このような卑語は多い。このような語は、『広辞苑』はもとよりハンディな国語辞典類や『NHK 発音アクセント辞典』などにも見られる語である。このような語は、ほかに「ドケ」(『高鷲村史』, 『東白川村誌』, 『川辺町史』, 『西白川村誌』, 『袖川村誌』, 『山縣郡志』, 『新修 上石津町史』, 『海津町史』, 『南濃町史 通史編』, 『養老町史 通史編 下巻』), 「ナンニモ」(『上之保村誌』, 『多治見のことば』), 「ニエクリカエル」(『大野町史 通史編』), 「ニクトラシー」(『八百津町史』, 『厚見郷土史』, 『笠松町史 第三卷』, 『川島町史 通史編』, 『本巣町史通史編』, 『赤坂町史』, 『輪之内町史』, 『平田町史下巻』, 『黒川村誌』, 『多治見のことば』, 『飛驒河合村誌通史編全』), 「ニクッタラーシー」(『御嵩町史民俗編』), 「ナニヤル」(『笠松町史 第三卷』, 『赤坂町史』) など、枚挙にいとまがない。

ただ一点興味深いのは、『岩波国語辞典』に、「くど」「ぐる」「けつ」は初版から見られるのに対して、「こいつ」は、第二版まで記載されず、第三版(1979)から採録されていることである。やはり、卑語には「共通語」として記述されにくい一面があるのである。一方、「くど」こそ、東條操編(1951)の『全国方言辞典』に見られるが、卑語的性格の強い「ぐる」「こいつ」「けつ」は見られないことは、「卑語」という文体的性質が「方言」という地域的な差と異なる次元であることが、方言研究の前提であることを古くから示していたという事実である。

すべての卑語について検証はできないが、地方生活者の側にこそ、「卑語＝方言(あるいは、卑語≒方言)」という意識があって、このような記述がなされたのではないか。言い換えれば、方言を卑下していたのは、むしろ地方生活者自身であったということである。そういう意識も方言集の卑語採録から読み取ることができよう。

他県にこのような記述に差異が見られるかは今後の課題であるが、方言とは純粋に地域の文化を表すことばであると捉えている地域があるとすれば、共通語としても見られる卑語を、ここまで採録することはないと予想される。

なお、語の一部が口語的になっている語も、「方言」として記述されることがある。「偽物」の意の「にせもん」は、『笠松町史』ほか、合計11の市町村史に記述されることを付け足しておく。

最後に、文体的に硬すぎて日常的には用いられない語も、同様の扱いを受けることを挙げる。ただ、そのような語は少ない。

- | | | |
|-----------|--------------------|------------------------|
| (74) しっかい | 悉皆。ことごとく。何もかも。 | [宮川村誌 (1981:900)] |
| (75) シッカイ | 悉皆。ことごとく。残らず。何もかも。 | [神岡町史通史編Ⅱ (2008:1111)] |
| (76) ナリワイ | 生産の業 | [新修 上石津町史 (2004:743)] |

「しっかい」も「なりわい」も、『岩波国語辞典 初版』に見られる語である。ちなみに、『全国方言辞典』には両語とも採録されていない。

これは、専門用語も同様である。

- | | | |
|-----------|------------------------------|-------------------------|
| (77) あしなか | ぞうり | [輪之内町史 (1981:740)] |
| (78) あしなか | 尻切草履 | [袖川村誌 (1916:187)] |
| (79) あしなか | 足裏半分くらいの草履、農耕に用う。 | [岐阜県小坂町誌 (1965:662)] |
| (80) あしなか | 尾切れ。草履の一種で、足が半ば地を踏むのでこのように言う | [宮川村誌 (1981:878)] |
| (81) アシナカ | 足裏半分の草履 | [美並村史 通史編下巻 (1984:745)] |
| (82) アシナカ | 尻切草履。足半か。 | [朝日村誌 (1956:468)] |
| (83) アシナカ | 足半。足の三分の一くらいの草履。 | [神岡町史通史編Ⅱ (2008:1077)] |
| (84) アシナカ | 土ふまずまでしかない藁ぞうり | [清見村誌下巻 (1976:736)] |

「あしなか」とは、「足半」と書く草履の一種で、鶴匠が用いることで知られる履物であるが、県内では川漁師などが用いている。この「あしなか」は、現代では特殊な場面にしか用いられないため、共通語としての意識がない専門用語である。

このような類には、地方の風習の記述も多い。『宮川村誌』には、「楮の皮を剥いで、平に並べておで編み、それを四方六センチくらいずつ折り曲げたもの」との意の「トチダナ」という語など、山林や林業に関する民俗語彙が多く見られる。また、『神岡町史 通史編Ⅱ』にも、「谷を堰いで水をため、それを切落して次々と下流へ木材を押し流すこと」の意で「テッポ」という語が見られる。このような特定の職業等で用いられる語を、どこまで「方言」と取るかは難しいが、このような語を収めたものは、民俗学的な関心を持つ編者が方言集を編んだ際によく見られる。

また、その地方の特産物もこのような類に含められようか。「栃の実を入れて搗いた餅」である「トチモチ」も、『藤橋村史』および『宮川村誌』に記述される。比喩的に用いた『下呂町誌 全』の「高い所へ上れない人」という意味や、『岐阜県小坂町誌』の「栃餅が粘り気が少ない意から川狩人夫の技巧拙劣なことをいう」という記述は、方言として成立するが、ふつうの「栃餅」は、地域の名産であっても、「方言」とはふつつ考えられない。

「方言」とは、圧倒的に多くは、「野卑な語」という意識であるが、反面、「耳慣れない語」という性質として捉えられていることも垣間見られるのである。

「ナレル」の記述も4つ見つかった。「なれ鮫」などのことばではよく聞く動詞でも、漬け物に使われるのは、やや専門的と言えようか。

(85) ナレル	漬物がつかる	[上宝村史下巻資料編 (2005:339)]
(86) ナレル	漬物がよくつかる	[清見村誌下巻 (1976:745)]
(87) ナレル	漬物が漬かること	[飛騨河合村誌通史編全 (1990:1116)]
(88) ナレル	漬物などの漬かること。	[神岡町史通史編Ⅱ (2008:1080)]

「なれる」は、『岩波国語辞典 初版』に「腐る」の意味しか見られない。『同 第七版』(2009)では、「原料がよくまじり合って互いになじむ。熟成する」の意が見られるが、例として「鮫」と「味噌」が挙がるのみで、「漬け物」について使用することが、はたして共通語の用法か否かは記述されていない。辞書を参照してもわからないことは、あるのである。

3.2 音訛以外の共通語採録の時代的変遷

共通語かわからない一部の語は措くとして、では、このような共通語が採録されるのは、「昔の学がない人が共通語と方言を区別できなくて収録してしまった間違っただ方言」なのであろうか。それを考えるために、「なぐる」や「ざっと」など5語を例に、時代ごとに方言集に採録された「共通語」を見てみよう。なお、以下に挙げる語はすべて、CASIOの電子辞書EX-word XD-A10000で複数辞書検索すると、『精選日本国語大辞典』『広辞苑』『明鏡国語辞典』『新和英大辞典』『NHK日本語発音アクセント辞典』などに記述が見られる、立派な共通語である。

(89) スクナイ	黴イ	[山縣郡志 (1918:345)]
(90) すねる	不満ノ態	[西白川村誌 (1924:(11))]
(91) なぐる	打つ	[岐阜県益田郡誌 (1916:540)]
(92) なぐる	打つ。欧 ^マ	[岐阜県方言集成稲葉郡 (1934:84)]
(93) なぐる	打つ	[改訂北方町史 (1932:938)]
(94) なぐる	動。打つことなり。	[本巢郡志 (1937:354)]

「すくない」「すねる」「なぐる」を「方言」と捉えているのは、戦前の記述のみである。つまり、このような記述は、辞書の発達・普及とともに参照できるものが増え、淘汰されていったものと考えられることができる。

戦後も「方言」として記述されてきたが、辞書の発達とともに記述が次第に減った項目もある。「ざっと」を例に取り上げてみる。

(95) ざっと	一、ひと通り。二、盲目。	[上寶村誌 (1943:769)]
(96) ざっと	あらまし及座頭	[袖川村誌 (1950:189)]
(97) ざっと	凡そ	[赤坂町史 (1953:532)]
(98) ざっと	概略のこと	[笠松町史 第三巻 (1957:540)]
(99) ざっと	凡そ。	[高鷲村史 (1960:752)]
(100) ざっと	概略を云う	[平田町史下巻 (1964:1202)]
(101) ざっと	概略のこと	[本巢町史 (1975:1303)]
(102) ザット	凡そ	[清見村誌 (1976:742)]
(103) ザット	① 大まかにいって (ザット千枚…など)	[白鳥町史 (1977:608)]

- (104) ざっと およそ。あらし。 [宮川村誌 (1981:899)]
- (105) ざっと 概略のこと [川島町史 通史編 (1982:1297)]
- (106) ざっと 概略のこと [厚見郷土史 (1987:300)]
- (107) ざっと あらし [岐阜市鷺山史誌 (1988:785)]

「ざっと」の記述がある町村史を刊行年順に並べてみると以上のようになる。戦前の『上寶村誌』に早くは見られ、同じ吉城郡内の袖川村(現 飛騨市神岡町)と宮川村(現 飛騨市)で、その『上寶村誌』を参照されたことは十分に考えられる。『厚見郷土史』と『岐阜市鷺山史誌』も同じ語の採録が多く、参照関係が十分に読み取れる。このように、参照関係にある場合に、このような共通語が(誤って方言として)継承されることは多いのは、同然のことと言えば当然のことである。一方で、「ざっと」は、1990年代以降、記述が見られなくなる。しかし、これもむしろ、卑語とのニュアンスを持たない日常語として用いられるからこそ記述されなくなった語と考えたほうがよいであろう。

反面、卑語的性質の強い「ドヤス」は、まず、最初の記述も上記「ナグル」より早く見え、さらに、「ざっと」と異なり、平成の世の中になっても多く辞書に記述されている。

- (108) どやす 強くなぐる [新修東白川村誌通史編 (1982:1199)]
- (109) どやす 打つ [東白川村誌 (1914:230)]
- (110) どやす 殴打す [益田郡誌 (1916:539)]
- (111) どやす 毆打す [袖川村誌 (1916:191)]
- (112) どやす 打ツ [西白川村誌 (1924:(16))]
- (113) どやす 殴打す [洞戸村誌 (1925:138)]
- (114) ドヤス・ドウヅク 欧打 [黒川村誌 (1937:21)]
- (115) どやす なぐる [下呂町誌全 (1954:709)]
- (116) どやす なぐる。 [高鷺村史 (1960:754)]
- (117) どやす・どづく 強くなぐる。 [萩原町誌 (1962:1284)]
- (118) どやす 欧打する。 [岐阜県小坂町誌 (1965:676)]
- (119) どやす なぐる [白川町誌 (1968:1005)]
- (120) どやす 殴る [兼山町史 (1972:1012)]
- (121) どやす 強くなぐる・たたく [蛭川村史 (1974:976)]
- (122) どやす なぐる [上之保村誌 (1976:422)]
- (123) ドヤス なぐるの強い言葉 [金山町誌 (1974:1303)]
- (124) ドヤス・ドズク なぐる [清見村誌下巻 (1976:744)]
- (125) ドヤス ドヤシツケル ①なぐる・打つ ②どなりつける [御嵩町史民俗編 (1978:736)]
- (126) どやす 殴る [武芸川町史 (1979:1083)]
- (127) どやす ①殴る。②罵倒すること。 [可児町史 通史編 (1980:1386)]
- (128) どやす 打擲する。うちたたく。 [宮川村誌 (1981:917)]
- (129) どやす なぐりつける [大野町史 通史編 (1985:1323)]
- (130) どやす 殴打する [洞戸村史 上巻 (1988:1087)]
- (131) ドヤス なぐる。たたく [飛騨河合村誌通史編全 (1990:1116)]
- (132) どやす なぐる [飛騨下呂 通史・民俗 (1990:468)]
- (133) どやす 強くたたく [竹原郷土誌 (1991:344)]
- (134) どやす どなりつける [関ヶ原町史 通史編別巻 (1993:140)]
- (135) ドヤス 殴る。 [山口村誌 下巻 (1993:849)]

(136) ドヤス	ぶったたく	[明宝村史 通史編下巻 (1993:1094)]
(137) どやす	たたく	[川辺町史 (1996:911)]
(138) ドヤス	打つ, 殴る。	[丹生川村史 民俗編 (1998:615)]
(139) ドヤス	打つ・なぐる	[新修 上石津町史 (2004:742)]
(140) どやす	殴る	[新修武芸川町史 (2005:1141)]

1970年代では、県内に27の市町村史に方言の記述が見られるが、そのうちの7編に、「ドヤス」が収録されている。およそ4分の1である。1990年代では、10編中8編で「ドヤス」が記述されている。

「ドヤス」の記述は、1940年刊の『大言海』にも見られる。また、小辞典でも『岩波国語辞典 初版』(1963)にも「打つ, なぐる, しかる意の俗語」と立項される。いずれかの辞書を参照していれば、共通語であるとの認識は持ちやすかったであろう。決して、「共通語における卑語」＝「方言の日常語」ではないのだから。

このように、卑語的性質のあるものを除き、共通語との意識は、方言集に徐々に浸透していき、「俚言」との意識は排除されていくのである。

3.3 何が方言か

言語はみな、次のような3種類の可変性をもつ。

ひとつは、時代による可変性である。古く共通語であったものが、時を経て方言になったことは今さら言うまでもない。「ばか」の意の「タワケ」も、現代語としては「方言」であるが、時代劇では「共通語」となる。これほどに極端であればわかりやすいが、わずかな時差による消失・残存によるまだら模様は認識されにくい。たとえば、当地では「喫茶店」の意味で「コーヒー屋」ということばは現役でよく使われるが、東京ではあまり使われないと聞く。全国にも、この語があっても古い語と認識されるところもあるだろう。つまり、「コーヒー屋」は「方言」である可能性があるのである。

次に、地域による可変性である。東海地方でよく使われる「いる」の尊敬語としての「ミエル」は、「食ベテミエル」のような補助動詞用法も得て、地域共通語となっている方言である。しかし、地域共通語となっていれば、純粋な「方言」としての意識は低くなり「方言」として記述されにくくなる。「模造紙」の意味の「B紙」も共通語として意識されているために、市町村史には一件の記述も見られなかった。

最後に、意味の可変性である。「ナレル」のように、漬け物にまで使われた際に「方言」としての性質をより強く呈するようになるものは、語義の分析を必要とするため、「方言」として記述されたりされなかったりする。『洞戸村誌』(1925), 『八百津町史』(1982), 『坂内村誌 民俗編』(1988)では、「バショ」ということばを「都会」という意味で記述する。ここまで極端であればわかりやすいが、実際には意味の外延が共通語と方言とで少しずれているという例は多く見つかる。

意味については、比喩的な表現についても触れておかなければならない。夏休みに流れるプールに行った際、関西アクセントの男性が「一周回ったから、次、もう降りよ」と言った。「プールから上がる」という意味である。これは、関西方言であろうか。同じことが、地方のある村で聞こえたら、おそらく「珍しい方言を採取した」と研究者を喜ばせるであろう。このようなことはいくらでもある。「メールを打つ」なども、「メールを書く」ではなく「キーボードで入力する」という性質を読み込んだからこそ「打つ」と使われるのであろうが、「流水プールから降りる」と大同小異である。方言の記述においても、このあたりに難しさを感じることもある。たとえば、次の記述は「方言」なのであろうか。

(141) スナジ	大酒家。砂地へ酒を注ぐ意。[神岡町史通史編Ⅱ (2008:1080)]
-----------	-------------------------------------

小辞典はおろか『日本国語大辞典』にも「砂地」にこのような意味が見られないとなれば、「方言」とするということもありうるが、そこまで調べて採録されたものかはわからない。むしろ、その地域でよく喩えられるとなれば、やはり「方言」と位置づけてよかろう。

方言との認定は相対的なもの。自分の使っていることばを記述するだけでなく、別の言語で使われないということが判って、相対的に規定されるものである。しかし、別の言語である共通語も時代によって変わっていく。「今の共通語」をよく認識したからといって、「方言」が必ずしも明確に切り出されるものではないこともまた事実。一部に「のりしろ」とも言える部分を共通しながら、「方言」と「共通語」は、記述されていくのである。

このように「方言」と「共通語」は、連続体であり明確な二分法で得られるものではない。だからこそ、県内の市町村史には、その程度の強弱はあれ、これだけの共通語が「方言」としての意識のもと、記述されたのであろう。

4. おわりに

このような共通語が方言集に採録されること自体、単なる学問的水準の低さが表れたものと考えられなくはない。しかし、「ヤットカメ (久し振り)」が「八十日目」と解釈されたり「タウケ (馬鹿)」が「零細農家が次男三男にまで田を分けることから」としたりする民間語源が、学問的に一定的な評価を得ていることを考えれば、なぜ、このような「共通語」が方言として意識されて方言集に採録されたのかを考えることは、一定の意味をもつものと考えることができる。事実、上で見てきたとおり、「共通語」との意識もさまざまな要因が考えられ、興味深い考察ができた。

前述の通り、このような観点から記述された論文を探したが、管見の限り見あたらなかった。柴田武編 (1978:461-464) でも、金田一春彦、徳川宗賢、林大による座談会形式で、方言と標準語について話し合い、「方言的なものだけを記録しようとするとき、実際は方言的なのに、標準語だと思って落としてしまうことがある」と林が述べている。しかし、逆に標準語であるにもかかわらず方言として記述される例については、何も述べられていない。単に、雑用ばかりが増え夏休みというものの消失した大学教員の怠惰により十分に調べ切れていないだけかもしれないが、方言として記述された「共通語」を考えることは、それなりの意義を有することであろう。

【付記】

本考察は、2011年度科学研究費基盤研究 (C)「岐阜県方言データベース構築ならびに総合記述に関する研究」(代表：山田敏弘，課題番号23520549)の成果の一部である。

【参考文献】 (本文中に引用した市郡町村史は除く)

- 加藤正信 (1982)「方言語彙の概説」『講座 日本語の語彙 8 方言の語彙』明治書院
 岐阜県立郡上高等学校方言研究会編 (1952)『郡上方言』郡上高校
 真田ふみ (1973-1994)『越中五箇山方言語彙』1~12, 私家版
 柴田武編 (1978)「方言語彙研究の歴史と展望」『日本方言の語彙』三省堂
 宮島達夫 (1962)「方言とお国ぶり」『国文学 解釈と鑑賞』316, 至文堂
 和田實 (1984)「方言辞典」『講座方言学 2 方言研究法』国書刊行会